

Book Preview

富山高校図書館 2026.5



『ムラブリ』

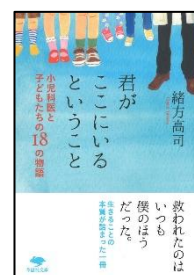
伊藤 雄馬【著】

就活から逃げ出した言語学徒の青年は、美しい言語を話す少数民族・ムラブリと出会った。文字のないムラブリ語を研究し、自由を愛するムラブリと暮らすうち、日本で培った常識は剥がれ、身体感覚までもが変わっていく……。言葉とはなにか？そして幸福、自由とはなにか？ムラブリ語研究をとおしてたどり着いた答えとは……。人間と言葉の新たな可能性を拓く、斬新極まる言語学ノンフィクション。

『君がここにいるということ』

緒方 高司【著】

受け持った子どもが死んでいくのを見ることの悲しさ、親の悲嘆を目の当たりにすることの辛さに、これから先、耐えていくことができるのか。本書は、一人でも多くの子もたちが元気になることを夢見て小児科医となった著者が、想像を絶する過酷な小児医療の現場で、実際に会った子どもたちとの交流を描いた実話である。懸命に病気と闘う子どもたちの姿を通して、生きることの大切さにあらためて気づかされる。



『聞く技術 聞いてもらう技術』

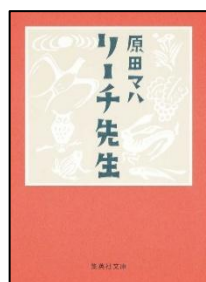
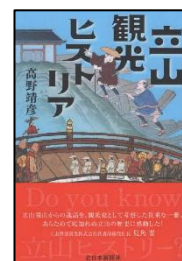
東畑 開人【著】

世の中にはたくさんの素晴らしい「聞く技術」本があるが、心理士としてひとつだけ不満があった。「聞く技術」を必要としているときほど、実は技術なんか使っている余裕がないことです。たとえば、パートナーや家族、同僚などの身近な人間関係で揉めているとき、あるいは政治や社会課題をめぐって敵と味方が二分されるとき等、本当は対話が必要なときこそ、僕らの「聞く」は不全に陥り、相手の話を聞いていられなくなる。そういうとき、必要なのは、「聞く技術」ではなく「聞いてもらう技術」です。聞くための小手先の技術から、聞いてもらうことに備わる深いちからまで、著者が20年近い臨床経験から学んだことを、すべて記した一冊。

『立山観光ヒストリア』

高野 靖彦【著】

年間100万人に迫る訪問者を迎える北アルプス・立山。平安時代は限られた人のための修験の場であったが、江戸時代には全国から多くの人びとが、霊山として訪れるようになった。宗教施設の建築など、多くの「名所」が創出されていく立山で、芦峯寺や岩峯寺にも、宿泊・飲食業、荷物運搬・山案内などの諸生業が発達していく。立山黒部アルペンルート開通以前の観光史を、はじめて系統立てて紹介する本著は、一般読者にも専門家にも、うれしい一冊となっている。霊山立山はいかにして世界有数の山岳観光地となったのか。立山山岳史の第一人者・高野靖彦（富山県〔立山博物館〕館長）が、信仰登山から観光登山まで、挫折と成功の歴史に迫る。



『リーチ先生』

原田 マハ【著】

1954年、大分の小鹿田を訪れたイギリス人陶芸家バーナード・リーチと出会った高市は、亡父・亀乃介がかつて彼に師事していたと知る。一時は遡り1909年、芸術に憧れる亀乃介は、日本の美を学ぼうと来日した青年リーチの助手になる。柳宗悦、濱田庄司ら若き芸術家と熱い友情を交わし、才能を開花させるリーチ。東洋と西洋の架け橋となったその生涯を、陶工父子の視点から描く感動のアート小説。